『随想録』より抜粋

23　難と易

御開山親鸞聖人様は獲信は難と教えられ、中興蓮如上人様は易いと教えられてあるがどんなに会通したらよいか。

御文章は凡夫往生の手鏡だから易いと自分の機に合わしているが、御文章の易いのだけが手鏡であって、他の御経や御聖教の難しいのは手鏡ではないのか。蓮師のみを生かして祖師は殺してもよいのか、両方を生かさなければ宗教も生きてはいないぞ。これを三段に分けて味わってみよう。

第一段は、信仰を概念の上で弄び、死後の遊戯に耽っているから易いのだ。

第二段は、信仰を自性の上に切り込んで、現生不退の体験を得ようとするから難しいのだ。

第三段は、信仰を身に諦得して、信に信功なく行に行功なき境地まで行ったから易いのだ。

第一段、真宗は易い　く　と易買いして真宗の同行の大部分が此の桁にいるのだ。成程御文章の文句は易い文字は易い。而し真意を得なければ画餅に等しく、満腹の時は見ていてよいけれども臨終の空腹に間に合わないぞ。蓮師は逆境に立ち、物質に恵まれず、北谷の雪の中に泣きの涙で御苦労遊ばし、真宗再興に全力を注ぎ、昔は雑行正行の分別も知らず、念仏だにも多く称うれば往生するとばかり思うていたが、大きな誤りであったと言われ、我が機は悪きいたずら者とおもいつめてと仰せられ、一念の信定まらん輩は十人は十人、百人は百人と仰せられてあるが、同行衆よ、雑行正行の分別がついたか、我が機は悪き徒者と思いつめてとあるが、徹底する迄見せつけられたか。見れば手間が掛ると逃げてはいないか。十人は十人、百人は百人だから易いと言っているが、一念の信が定まったか。一念の信

が定まらない者は千人いても万人いても一人も真実報土には往生は出来ないのだ。御言葉の上は優しいけれども真宗の極意の目釘は決して抜いてはないぞ。易い易いに釣られて来る事はよいが、何時迄も幼稚園の生徒ではないのだ。　真の易さまで進んで戴かなくてはならない。

法を死後に眺めて、死んだらお助け　く　、はいの返事も向うから

たのませてたのまれ給ふ弥陀なれば
たのむ心もわれとおこさじ

とか、戴いた信が誠なら往生は一定とか、「凡夫をはたらかせぬ本形のまま、生るべからざる者を生れさせたればこそ、超世の悲願とも横超の直道ともならいはんべれ」とか仰ってあ

る。「あら心得易の安心や、行き易の浄土や」と申されてあるから、凡夫は機を見る事はいらない、成って来いとは仰せられないからと、求める根機の熟不熟も考えず、信前のほやほやに信後開発した後の御言葉を並べて、ぼた餅で頬を叩くような教え方をして　悪人正機を募らし、自惚れを増長さしては居らないか。

易い易いと聞きながら、聞即信と承知しながら、二十年聞いても三十年聞いても解決もつかず、水際も立たず、角目も判らず、慶びも出て来なければ心配もない。苦痛もなければ煩悶もない。疑いも無ければ自力も起こしてはいない。時々煩悩が眼に付けば、この者をお目当てとは有難いと包んで置く。慶びが出て来ない時は、慶んで来いとは仰らんと膏薬を貼って置く。気持ちの悪い心が出て来ると、親を雇うて来ては死んだらお助け　く　と壓え

て貰う。信楽開発を百里の最後とすれば、こんな機の出て来る信仰は五十里の程度しか進んでいないのだ。（『魂のささやき』「信後の真似をするな」の下に詳述）

こんな曖昧な信仰で一生終わったら親様に何と申訳をなさる。合点した位では五十二段は超証出来ませんよ。易いく に誤魔化されて金箔をつけて包む稽古しているのでは真の大満足は出来ませんよ。

第二段、聖道門は易信難行が据わりであり、浄土門は難信易行が根底である事を忘れてはならない。大経下巻の末終には、僅か四行の間にも九字も難の字を出され、小経の終には一切世間難信の法、甚難稀有の法と教えられ、聖人様は「弘誓の強縁は多生にも値い叵く真実

の浄信は億劫にも獲叵し」と仰せられ、御和讃には度々難信なる事を説いておらるるのに、御文章のみを往生の手鏡として他の一切の経典師釈を反古にする事は矛盾してはいないか。

難は法の尊高を顕すと言って押しのけていては、花は折りたし枝は高しで機に受ける事が出来ないではないか。聖人様は「無上の妙果成じ難きには非ず、真実の信楽実に獲ること難し」と仰せられてあるのは、法が難しいのではなく、難化の衆生の機が難しいのではないか。それにもかかわらず自分は素直な者、宿善の厚い者と自惚れているから　邪見憍慢の悪衆生と聖人様から叱られていても、他人の事と思っているので信楽を受持していないではないか。　本願や名号を死後に眺めているから「微塵劫を超過すれども仏の願力には帰し叵く大信海には入り叵し、誠に傷嗟すべし、深く悲嘆すべし」と聖人様を苦しめているのではないか、それが獅子身中の虫ではないか。

法が難しいのではないのだ、受ける機の根機が調っていないから難しいのだ。難治の三病が自分ではないか、難化の三機が自分ではないか。その機の始末、解決がついていないから何十年聞いてもはっきりしないのだ。聖人様はそれに驚かれて百夜の祈願となったのではないか。この心の蟠っている事は親株同行に成らねば見えて来ないのだ。四五十里の程度にいる時はこの者お助け、この者お救いで折り合っていたけれども、何処でお助けか、何時お救いかと切込むと、死んだら五十二段、それなら生きている間は助かっていないではないか、救われていないではないか。いや今は摂取の懐住いだと。何を仰る、摂取されている人間ならこの者お助けとは言いませんよ。この者とお助けと二つ有る時は機法一体、仏凡一体ではありませんよ。摂取された人なら本願や行者、行者や本願だから「ひょっと」、「これでよかろうか」、「どうも」と言う怪しいやつは微塵もいませんよ。他人の後生ではない、自分に忠実な者なら一度位自分の機を探って見たらどうだ。

我が機に問うな弥陀に問えと信後の言葉で化かしているが、親の助けるに間違いが無いが届いたのなら、子から言えば助かるに間違いがないでなければならない。晴れたお慈悲に逢えば晴れると言うが晴れましたか。破闇満願と言うが晴れて満足が出来ましたか。晴れもしなければ満足も出来ないから、こんな事でよいかしらと危ぶみの疑いが出て来るのではないか。それから先は、真剣に成れば成る程自分の心の平気でいる事に驚くのだ。七十里八十里九十里と根機が調うにつれて実機が照らし出されて、頭は承知しながら、心の奥底に地獄とも極楽とも思わぬ機のいる事に驚くのだ。この機は千年経っても承知する者でないと聞かされても承知しない者がどうして助かるか。本願を受付けないものがどうして救われるか。合点なら誰でも出来るけれども、うんともすんとも言わない者は何処で助かるか。その者の為の五兆の願行ではないか。願行ではないかと言うのは理屈ではないか。願行の念力が届いたのなら開発していなければ自分一人の為であったと満足が出来ないではないか。法の手元

の機法一体、願行具足は十劫の昔に成就してあると承知していても、信念冥合の機法一体を諦得しないから現生不退の妙味を知らないのではないか。真剣に切込んで求める姿が、大千世界に満てらん火をも過ぎ行きての態度であり、びくとも動かぬ機を乗切って進む姿が難中の難であり、急いで急がず、周章てて周章てぬ姿が逆謗の屍であり、やめるも出来ず進むも出来ぬ境地が三定死の立場であり、思慮分別の間に合わなくなった時が「いずれの行も及び難き身なれば」、その境地に立ってこそ各自が出離の縁有ること無しを実感するのではないか。今迄は他人にさして、自分はその通り　く　と調子を合わし合点しているのだから、地獄と聞いても驚かず、極楽と聞いても慶ばず、感情だけは泣きもし、慶びもしたろうけれども、久遠劫からの実機は助かっていないのだ。それが今九十九里まで進んで来て往生の望みが絶えた時、言葉に掛らぬ難中の難に乗り上げているのだ。

第三段、何処に他力が有るのだ、何処に唯が有るのだ。この苦悩を導く知識はいないか、この苦境を通ぜしむる大徳はいないか、八千遍の苦労は何処に有るのだ、自分一人は宿善が無いのかと攻め立てられている時が、観経下々品の苦逼失念を心の上で味わっている臨終なのだ。何とかならぬかとあせっているのが、最後の自力の喘ぎなのだ。うんともすんとも動かぬ逆謗の屍が切り堕とされて「どうしようか」と言葉に出たが先か、摂取されたが先か、第十八願では「唯除五逆誹謗正法」と切り堕とされてあるが、善導様は「すべて水火の難に堕せんことを畏れざれ」と摂取の方を顕され、無間のどん底から生え抜きの法龍が五十二段の跡取りとは不思議の中の不思議ではなかったか。

「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏もうさんと思ひたつ心のおこるとき摂取不捨の利益にあづけしめたまふ」とは、往生の望みの絶えた時が

自力の機執が切り堕とされた時であり、往生を遂ぐるなりと信じた時が他力不思議に摂取された時であり、それは説筆に次第はあるけれども、同時の妙味で切り堕とされた儘が助かったとは不思議の中の不思議ではないか。煩悩熾盛の一杯が至徳具足であり、妄念乱動の有りたけが本願の大智海であり、下根下劣の悪衆生が正定不退の大菩薩とは、心も言葉も絶えた妙味ではないか。本願や行者、行者や本願、身も心も南無阿弥陀仏、信ずる心も念ずる心も皆南無阿弥陀仏の独りばたらきであったのか。今迄は計らうまいと計らうており、疑うまいと疑うていたが、今は計らいつきて親に計らわれていた事に驚き、疑いつきて疑いなく救われた事を感謝せずにはおられないのだ。

願力無窮にましませば　　罪業深重重からず

仏智無辺にましませば　　散乱放逸もすてられず

罪かかえながら障り持ちながら、絶対無条件とは「あら心得易の安心や」。噴き上げる妄念のありたけのお救いとは「あら行きやすの浄土や」。易いと言う言葉までもいらない易さであった。浮くも沈むも南無阿弥陀仏、信に信功なく行に行功なし、義なきを義とすとは不思議ではないか。法を見てよし機を見てよし、広い天地じゃ自由の境地じゃ、出て来い　く　渦巻く心の有りたけで、南無阿弥陀仏の活動さして戴くのだ。往生の一段は仏智の不思議で足り過ぎたのだ。報謝の一段は微塵いささか出来ていない事に驚くのだ。信楽開発以後は、往生いかがと言うような事は微塵も考えないのだ。全生命を挙げて自分の使命を果たしつつ、まだ足りない　く　報謝が足りない　く　と猛進するのだ。だから易い

にも　真似(まね)の易(やす)いのと苦抜(くぬ)けした真(しん)の易(やす)さが有(あ)るから、同行衆(どうぎょうしゅう)よ、実地(じっち)の体験(たいけん)を忘(わす)れて有頂天(うちょうてん)になっていてはいけないぞ。